

今週のメニュー

■トピックス

◇「塩ビ産業の活力復活を」

－森新会長 VEC総会後の懇親会にて挨拶－

■随想

◇古代ヤマトの遠景（64）－【稻荷山古墳の鉄剣】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇「塩ビ産業の活力復活を」

－森新会長 VEC総会後の懇親会にて挨拶－

5月22日（火）に、塩ビ工業・環境協会第15回総会・懇親会を開催いたしました。今年度は役員の改選期にあたり、森会長（信越化学工業(株) 代表取締役社長）、山本副会長（東ソー(株) 常務取締役）が新しく就任いたしました。以下に、森新会長の懇親会での挨拶を掲載いたします。

本日は皆様ご多用中のところ、多数ご出席を賜り、誠に有難うございます。

ご列席頂きました、経済産業省 製造産業局の川上審議官様をはじめ関係官庁の皆様、塩ビ製品業界や商社の皆様、マスコミの皆様、さらには日頃より塩ビ産業に様々なご支援をお寄せくださっている皆様におかれましては、平素より塩ビ工業・環境協会の活動へのご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

先刻開催されました塩ビ工業・環境協会の第15回総会におきまして、中原会長の後を受けまして、わたくし森が、会長の大役を拝命したところでございます。中原前会長におかれましては、塩ビ業界の発展のためにご尽力ご貢献いただきましたことに、改めて心からの敬意と謝意を表したいと思います。

当協会の初代会長は、信越化学の現会長の金川でございますが、歴代のVEC会長の名に恥じないよう務めたく存じます。

幸いな事に、この度はご見識、ご経験が豊富な東ソーの山本常務取締役に副会長をお引き受け頂き大変心強く思っております。

今後は、新役員で力を合わせて塩ビ産業の益々の発展のため、微力を尽くす覚悟でございますので、ご列席の皆様の一層のご助力、ご指導をお願いするものであります。



森新会長



川上審議官



山本副会長

この1年間を振り返りますと、東日本大震災、福島原発事故による電力不足、タイの水害、円高、資源高などに見舞われ、国内景気は大きく落ち込みました。その後、災害により落ち込んだ生産活動が復活し、ようやく上向き兆しも出てきております。しかしながら、依然として電力供給の不安や政局の不安定、海外景気の不透明性などの不確定要因が残っており、何とか安定した状況になってくれればと願っております。

塩ビ樹脂は、2011年度の生産が140万トン、国内出荷が102万トンと前年比97%でしたが、震災対応で輸入が増加したことを考慮するとほぼ前年並みの国内出荷となりました。震災復興による需要の本格化がいつになるのか、まだはつきり致しませんが、被災された方々のためにも少しでも早く本格的な復興が始まってほしいものです。

塩ビ業界は、塩ビ製品の特性を再認識していただき、需要増につなげるため、以前から『塩ビは地球環境に優しい、社会の持続的な発展を支える素材であり、その良さを発信し、ポジティブなイメージを根付かせる』活動を行って参りました。

これまでの関係各位のご努力によって、環境優位性、コストも含めた塩ビの良さが再認識され、塩ビについてのイメージは改善されてきています。過去、塩ビから非塩ビの素材へ代替したいろいろな分野で、塩ビへの回帰の動きが着実に進んできています。

今後のVECの活動も、この動きを更に進め、需要回帰、新規用途開発などにより塩ビ産業の復活に取り組んでいきたいと考えております。

昨年度行った「塩ビものづくりコンテスト2011」は塩ビ関連の7団体が主催し331点もの作品が集まり、好評をいただきました。今年度は「PVC Design Award 2012」と名称を改め、4月18日にキックオフし11月には審査結果の発表と表彰を予定しております。サプライチェーンとの連携と新たな塩ビ製品の価値創造によって、塩ビ業界全体の活力が引き出されることを期待しています。

また、継続してリサイクルの推進、樹脂窓の普及促進、化学物質管理と保安問題などについて、各界への積極的な働きかけや広報を実施して参ります。

リサイクルビジョンの公表から5年が経過しましたが、今後も支援制度を含めて継続して推進していきます。エコポイント制度で普及が進む樹脂窓も住宅省エネのツールとして重要性が増しており、より高性能なサッシの普及を目指したいと思っております。

残念なことに昨年度には国内外とも塩ビ関連工場の事故がありました。従来から工場の保安技術向上を図るため、会員会社から担当が集まり保安会議を行いヒヤリハット事例などの情報共有化を行って参りました。今後もより内容を充実し継続していくことによって一層の事故防止に取り組んで参りたいと存じます。

塩ビ産業の置かれている環境には、節電、市場の先行き不透明感など厳しいものがありますが、多くの方に塩ビの良さをご理解いただくことによって、需要の回復につなげていきたいと考えております。改めまして、本日ご列席の経済産業省をはじめ関係行政府のご支援をお願いすると共に、塩ビ関連業界、塩ビ製品をご愛顧いただいておりますユーザー業界、マスコミ関係各位のご支援、ご協力をお願い申し上げる次第でございます。

最後に、本日ご列席の各社の事業の益々のご発展と、ご参集の皆様のご健康、ご多幸を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。(了)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（64）－【稲荷山古墳の鉄剣】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

応神王家の中で雄略天皇は最も注目すべき人物だと言える。彼の事績は記紀の中に多くが記録されているが、極めて性格が激しかったらしく、彼の粗暴なる振る舞いの記述で溢れている。その全てが事実とはとても考えられないが、更にその実在性についても、多くの天皇と同様に文書だけからではそれを証明するのは難しい。ところがこの雄略天皇に限って、その実在性を証明できるとみられる考古学的資料が発見されている。それが稲荷山古墳から出土した鉄剣である。

稲荷山古墳とは、埼玉県行田市の「さきたま古墳群」の一角にある墳丘長一二〇mの前方後円墳のことである。築造されたのは五世紀末とされており、墳墓の大きさから見て、当時、相当の豪族がこの地方に存在していたことがわかる。稲荷山古墳の名称は、後円墳の頭頂に稲荷神社があったことによるものであるが、このような例は全国的に幾つもあり、特に珍しいものではない。



稲荷山古墳

この古墳の同じく頭頂部から鉄剣が発見されたのが、一九六八年のことである。その後、一九七八年にこの鉄剣の両面から金象嵌の文字が発見され、考古学上の大発見となった。表裏一一五文字の銘文をどのように読むのかは難しい問題であったが、現在は次のように解読されている。

〔表〕辛亥の年七月中、記す。オワケの臣、上祖、名はオホヒコ。
其の児、タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。
其の児、名はタカヒシワケ。其の児、名はタサキワケ。
其の児、名はハテヒ。

〔裏〕其の児、名はカサヒヨ。其の児、名はオワケの臣。世々、
杖刀人^{じょうとうじん}の首^{かしら}と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケル
大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の
百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也
(注：「寺」とは「時」のこと)

この銘文から判明している内容は、以下のようなものである。

イ この鉄剣を製作したのはオワケの臣で、この臣は、その祖オホヒコから八代目の孫に当る。その系譜は次のようになる。

- ①オホヒコ
- ②タカリのスクネ
- ③テヨカリワケ
- ④タカヒシワケ
- ⑤タサキワケ
- ⑥ハテヒ
- ⑦カサヒヨ
- ⑧オワケの臣



稲荷山古墳の国宝
金象嵌銘鉄剣(表裏)

口 銘文中の辛亥年は、四七一年説と五三一年説とがあったが現在は、四七一年説が定説となっている。この四七一年説を採れば、文中のワカタケル大王は雄略天皇と比定されることになる。

ハ この一族は杖刀人の首として、世々王権に奉仕しオワケの臣に至っている。

ニ ワカタケル大王の時代に、オワケの臣は大王の政治を輔佐し、また、この鉄剣を作らせてオワケ一族の奉仕の歴史を明らかにし、さらに自分の功績の証としている。



金象嵌の文字が読める

このような鉄剣の銘文から次のようなことが明らかとなってくる。

- ① オワケ臣を雄略天皇時代の人物とすると、八代前のオホヒコの時代は約二百年前に当たり、三世紀末から四世紀初頭にかけての時代となる。この時代にオホヒコなる皇子、或いはそれに準ずる人物が武蔵へ派遣されたと考えられる。
- ② 杖刀人とは、倭王を護る親衛隊であるとの解釈が一般的であり、そうであれば杖刀人の首とは親衛隊長ということになる。倭王の最も近くにいる親衛隊長を氏素性のわからないような人物に任せるとは考えられないことから、このような解釈が正しいとすれば、オワケ臣一族は、倭王家とは深い信頼関係があったと想定されることになる。このような信頼関係の淵源は、やはり彼らの祖であるオホヒコなる人物が当時の皇子、或いは皇子相当の人物であったことによるものといえよう。
- ③ オワケ臣は、豪族の次男か三男といった立場の人物と考えられ、大和の地に出向き杖刀人の首として、かなりの年月その職務を勤めたと考えられる。彼は個人的には優秀な人物であったことから、その見識を見込まれて政治の舞台で活躍したと想定される。地元の父親も倭王家に極めて協力的であったことから、さきたまの地の首長として、一二〇mもある前方後円墳を築造できたと考えられる。オワケ臣は晩年になり体力・気力の衰えから大王に暇乞いをし、鉄剣を製作して故郷に戻り、死後、父親の墳墓の頭頂部に埋葬された、といったことが想定される。
- ④ この銘文によって知ることのできる極めて重要な内容は、東国の由緒ある豪族の倭王家に対する関係が八世代に亘って変化していないことである。八世代をここでは約二百年の歳月と想定しているが、この間にホムタ・オシクマ戦争があり出雲王家から応神王家に替わった。

しかし、東国にあっては、このような変化も単なる皇位継承問題に過ぎなかったことを示していることになる。もし、王朝の交替であれば、彼らが倭王に近かったと見られるだけに、その地位は大きく変化したはずである。ところが銘文にその変化は記されていない。このことは、彼らからみて大和の倭王家は、初代倭王から一貫して変化していないと認識されていたことになる。従って、応神王家と名付けてはいるが、応神天皇は前述したように、出雲王家の血を引く皇子であるとの想定の正しいことを、この銘文は明らかにしている。

(つづく)

■ 編集後記

この 22 日に弊協会の総会を開催し、森会長の就任が決まりました。トピックスの会長挨拶にありますが、塩ビについてのイメージは改善してきていますが、過去の需要量と比較するとまだまだ塩ビ需要が回復したとは言えないレベルです。新会長のもと、塩ビ産業全体の活力を結集し、需要回復の活動に取り組んでいきたいと思っています。

今週初めには一生で一度の金環日食を見ようと眼鏡を用意していましたが、残念ながら雲が多くよく見えませんでした。皆様は如何だったでしょうか。(可)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp

